生命の美と漆芸表現
—愛娘の成長を通して

東京藝術大学大学院 美術研究科 博士後期課程
美術専攻 工芸研究領域（漆芸）
1318916　馬　莉

要旨

本論の目的は、「小蕾」という名の女の子と「小蕾」の下部の乗り物の表現を通じて、生命の成長過程を表現する制作背景、作品、技法等について論じる。筆者は制作のなかで「小蕾」の主題の成長過程を通じて、生命と自然を含む生命の美を示すことを目指している。その上で、絶えず変化する活気に満ちた生命の生活に焦点を当てることこそは、まさに伝統的な中国美術の最も基本的な原則のひとつであることも示す。

上記のテーマを中心とした研究背景は、主に次の 2 つの理由に基づいている。ひとつは中国の芸術的伝統の継承であり、もうひとつは筆者の個人的な考えや感情の維持である。中国の芸術は古くから「生命」に焦点を当てる伝統があると考える。副葬品などを除けば、中国の芸術は常に日常生活に注意を払い、死後の世界に足を踏み入れることは少なかった。中国の芸術の基本原則は、生命の偉大さへの配慮から導き出されている。芸術表現にはさまざまな形式があるが、それらはすべて、人間と自然の調和の妙がもっとも美しいとされたものである。

筆者が博士課程に通い始めた頃、一人娘は３歳であった。筆者は離れて暮らす娘の感情を作品の制作に投影するようになった。以上のように「小蕾」のシリーズの姿は、作者の唯一の娘に基づいている。同時に、子どもたちの心理的発達の法則と人生の各段階での想像力に着想を得て「小蕾」の乗り物（または空間）を形作った。乗り物（または空間）自体は、成長のプロセスを示す。成長のプロセスは、生命の美を表現するための不可欠な部分である。

本論は３章からなる。

まず第Ｉ章では、主に伝統的な中国の芸術がどのように生命の美を表現するかについて論述する。それは筆者の創作の理論的基礎を構成する。一般的に言えば、中国哲学は生命と人を重んじる哲学であり、このような考え方は伝統芸術の創作に大きな影響を与えた。

中国伝統芸術では、主題として、日常生活のテーマを表現することに焦点が当てられ、すべての生命の素晴らしい活力にも焦点が当てられる。中国と日本の伝統芸術を比較すると、自然を主張することは同じだが、生命を表現するとき、中国の伝統芸術は人物に注意を払う。「百子図」や「嬰戯画」は最も典型である。

また、美意識の観点からみると、中国の芸術は「形」よりも「神」を重視し、究極の目標として「写実」を追求するだけではなく、「写意」に関心を示してきた。このため、彼らはしばしば象徴性や誇張を使用してイメージを作り、人々に視覚的な衝撃と精神的な震撼を与えた。

第Ⅱ章では、主に子供の発達段階の理論と筆者の娘である「小蕾」の観察に基づいて、生命の成長過程と生命の美について説明する。これこそは筆者の創作の基礎を構成している。

筆者は、子供の心理的発達の段階的な区別から、「小蕾」シリーズ作品を作っている。子供はまず直感的に行動する。直感の次の段階では、子供の記憶に保存された外部世界とのつながりのイメージが増加する一方となる。イメージの蓄積に伴って、子供たちは外部刺激の影響を受けずに、記憶したイメージに基づいて思考することができるようになる。このようにして、思考活動の質的変化が生まれ、イメージ思考が生まれる。その次の段階では、言語の習得により、新しい質的変化が起こり、抽象的な論理的思考が出現する。

「小蕾」の成長は、以上に述べた直観-イメージ-抽象の論理プロセスに基づいている。「小蕾」を取り囲む空間や「小蕾」の乗る乗り物では、「小蕾」がさまざまな年齢で持つ想像力を誇張した表現を行った。このことを通して、生命力の力強さの表現を試みた。そして、成長の動的な過程の表現を通して、人生の美を表現した。

第Ⅲ章では、博士学位審査提出作品について論述する。テーマは、各段階での「小蕾」の姿によって示される。「小蕾」シリーズは5作品である。それぞれの作品は、さまざまな形の「小蕾」と、「小蕾」の乗り物（空間）で構成されている。その中で、「小蕾」は生命を表現し、乗り物（空間）は自然を表現する。それによって人間と自然が調和し、共に成長するという生命の美を構築する。乗り物（空間）は象徴的な姿で表現したが、「小蕾」の姿と比較して、その比率は特に誇張されている。この表現は、花開く生命とその可能性の大きさを示している。

結論として、中国伝統芸術の古典的な主題である生命の美と成長の表現における漆の可能性を示す。筆者は、芸術は生活に根ざし、生活よりも高次なものと信じている。現実の形象を現代的かつ芸術として処理することで、美術の伝統を継続し、時を越える理念を表現することができる。漆芸の制作過程において、造形や装飾表現の研究を基盤に、より豊かで立体的な姿を用いて、成長過程や生命の美を表現することが筆者の今後の課題である。